

第3回 第1章 古代国家の形成と貴族文化の誕生

大和王権と古墳文化

執筆・講師
渡辺晃宏

学習のねらい

3世紀後半から6世紀ごろまでの倭国では、前方後円墳を中心にたくさんの古墳が造られた。この時代を古墳時代と呼び、この間の4世紀初めには、大和を中心とする大和王権と呼ぶ王権が成立する。それはどうしてわかり、その支配のしくみはどのようなものだったか。また当時の文化とその担い手はどのようなものだったのか。これらについて、東アジア世界の動きも視野に入れながら考えてみよう。

古墳の出現と大和王権の成立

3世紀後半ごろ、近畿地方から瀬戸内海沿岸にかけて出現した前方後円墳ぜんぽうこうえんふんと呼ぶ大きな墳丘をもつ古墳は、しだいに西は九州南部、東は東北地方南部にまで広がっていく。形や副葬品が共通する古墳が各地に広まったことは、それまでの小国を統一する王権が誕生したことを意味する。その中心は大和を中心とした近畿地方で、4世紀初めの倭国では、古墳を造った各地の王が、大和地方の王を盟主として政治的な連合体を形成するようになったと考えられる。これを大和王権やまとおうけんと呼ぶ。大和王権の王は、大王だいおうと呼ばれるようになる。

古墳がさかんに造られた3世紀後半ごろから6世紀ごろまでを古墳時代と呼び、一般に前期（3世紀後半から4世紀まで）、中期（5世紀）、後期（6世紀）に分けている。中でも5世紀の前方後円墳には、大仙陵古墳だいせんりょうや誉田御廟山古墳こんだごびょうやまのように、世界的に見ても墳墓として隔絶した規模のものが多く造られるようになった。古墳は7世紀の飛鳥時代まで造られるが、この時期の古墳は終末期古墳と呼んで区別している。

大陸文化の摂取と渡来人

倭国の大和王権は、鉄などの資源や先進的な技術を求めて、高句麗こうくり・百済くだら・新羅しらぎの三国が勢力を争っていた朝鮮半島に進出しようとした。大和王権が百済と同盟関係を結んだことは、百済の王から送られたみられる七支刀しちしとうの銘文から明らかで、実際に高句麗と戦ったことは高句麗の広開土王こうかいどおう（好太王こうたいおう）碑文に記されている。

こうした朝鮮半島での立場を有利にするために、大和王権の5代の王（倭の五王）は、5世紀初めから約1世紀にわたって、宋そうなど中国南朝に使者を派遣して朝貢し、軍事的に高い称号を得ようとした。中国の王朝は、必ずしも希望通りの称号を認めたわけではなかったが、朝鮮

半島への進出によって、倭国は大陸の先進的な技術や文化を取り入れることに成功し、軍事的・経済的に大きな力をもつようになった。

この時代に伝わった文化としては、漢字と仏教が特に重要である。文化の摂取の主な担い手は、朝鮮半島や中国から倭国にやって来た渡来人^{とらいじん}で、大和王権の発展に果たした彼らの役割は大きかった。なお、漢字は、独自の文字をもたなかった倭国の言葉を表記する外国の文字であったが、のちに独自の文字である かなを生み出すことで、日本の文字としてその文化形成に大きなはたらきを担った。

大和王権の支配のしくみ

大和王権は、近畿地方を中心とする有力な豪族の連合政権で、各豪族は、血縁に基づく政治集団である氏^{うじ}を代表する責任者 氏上^{うじのかみ}が氏を率いて大王に仕える体制を取った。大王は各氏に対し、地位や身分、役割を示す、臣^{おみ}・連^{むらじ}などの姓^{かばね}と呼ばれる称号を与えて組織した。また、地方豪族を国造^{くにのみやつこ}に任じ、直^{あた}などの姓を与えて組織し、地方豪族を通じてその支配下の人々を支配した。このような大和王権の支配のしくみを氏姓制度^{しせい}と呼ぶ。

地方豪族の中には、直接大和王権に仕える者もあった。埼玉県^{いなりやま}の稲荷山古墳出土の鉄剣には、オワケの臣^{おみ}が先祖代々ワカタケル大王に仕えてきた経歴が記されている。オワケの臣が大和の豪族か関東の豪族かは意見が分かれるが、ワカタケル大王の支配が、関東地方に及んでいたことがわかる。この銘文の発見で、熊本県の江田船山古墳出土の大刀の銘文に見える大王もワカタケル大王であることが明らかになり、『宋書』倭国伝^{え た ふなやま}に見える倭の五王の一人、武^ぶの上表文に見られる全国支配の様子が裏付けられることになった。